

# 叔父・巖谷小波の思い出

佐久間 重代

明治百年にちなんで私の叔父・巖谷小波のことをかくようにと編集部からお話がありました。

叔父がなくなりましてからすでに三十五年以上が過ぎ去っております、遠いむかしむかしの

お話ですが、記憶をたどって私の感じたことを記させていただきたいと存じます。

## 生い立ちについて

小波は私の母の弟に当たり、明治三年六月六日、麴町区平河町（現在の千代田区）に生まれました。本名は季雄と申しました。父は巖谷修といい、本来滋賀県水口藩の医者でした。維新の時政界にはいり、太政官の内史の役につき、明治二十四年には貴族院議員に勅選されました。漢詩や書道をよくし、一六と号して、むしろ書家として有名でした。

実母は小波の生後四か月で病死したため里子にやられました。が、四歳の時に本家に帰って第二の母に育てられました。その母堂は慈愛にあふれた賢婦人でした。小波も生涯敬慕し

ており、わがままばかり言っておまかせたことをすまなかった、と述懐しておられました。私にとっては祖母に当たりますが、実に思いやりのある温情豊かで誠実な人でした。小波が多くの子どもたちから「お伽のおじさん」として親しまれたのも、全くこうした母親に育てられたことによると思います。

兄弟姉妹は十名で、小波は六番めです。長兄は工学研究のためドイツに留学し、次兄も工学士で他家の養子となりました。巖谷家はもともと医者でしたから、三男の小波にはぜひ医学に進ませるつもりで幼い頃からドイツ語を学ばせ、小学校卒業後も医学予備学校へ入学、医学を目標とする教育を受

けさせられました。

### 文学に志した動機について

ところが、当の本人は幼年時代から文学を愛好する心がつよく、医学のことは気のりしませんでした。父兄にかくれては文学少年の道歩んでいきました。その背景には小学校の頃から漢詩の作り方を伝授した父や、和歌の作り方を教えたり、謡曲、狂言、小説、伝奇などをおもしろくきかせてくれた祖母や、祖母のつき人であった老女がいたわけです。

ところで小波が十歳の時、長兄がドイツ留学中に「メルヘン」の本をドイツ語の勉強をはげます意味で送りとどけました。この本は「フランツオト」というドイツの児童文化研究者が、独、仏、英などの諸国に昔から伝わる伝説、口碑の類から創作童話までを編集した読みものでした。この本をよく読んでドイツ語を勉強し、りっぱな医学生になるようにとの長兄の贈りものが、意に反して文学者としての将来を決定する最大なものとなったのです。

### 性格について

小波の性格は、いつも明るく朗らかで、楽天的な、だれと

でもききくに話のできる人でした。子どもたちはもちろん、おとなや老人にもよろこばれ、親しまれる円満な人物でした。子どもたちを集めて、にぎやかに楽しませることが大好きで、毎年お正月には自宅で、おとなはかるた会、子どもは春遊会と称して、親類、知人の子どもを招待し、おとぎ芝居や、宝さがし、福引き等の余興があつて、小波叔父も子どもの仲間にはいつて楽しく遊ぶのでした。この春遊会は、私どもまねかれた者には一生の楽しい思い出となって残っております。

### 創作童話について

小波の創作童話は「こがね丸」をはじめ、二千種をこえる数にのぼります。全作品をつらぬいている精神は、子どもはあくまでも子どもらしく無邪気であれ、おとなっぽい理屈をいったり、つまらぬことに感傷的になるな、ということ、軽快明朗な文章によって、あっさりしたおかしみと、光明性、楽天性を表現するのが特色といわれております。

私をはじめ向島の方の私立幼稚園の保姆になりましたのは、明治四十一年のことですが、そのころ園児に小波叔父の創作童話をいくつも話してきかせましたが、特に子どもたち

によるこぼれ、たびたび話してとせがまれました。「たぬきのからつづみ」、「兎の片耳」、「鬼だまし」などは、前記の小波童話の特色をよくしめしているように思われます。

明治時代は現在とちがって、テレビ、ラジオ、映画といったものも、見たりきいたりして楽しむ機会がなく、幼児や少年少女たちの絵本や、読みものなども乏しかったので、子どもたちの生活は豊かな夢をはぐくむことができませんでした。その時代に小波はよい指導者として多くのおとぎ話や、おとぎ劇（子ども芝居）を創作し、わが国における児童文学の先達となるとともに、子どもたちの情操教育にも、なにがしかの貢献をしたのであります。

この間の社会文化の進歩発達は、まことにめざましいものがあり、子どもたちをとりまく環境も、大きく変化しております。したがって小波ののこした二千にあまる創作童話も、はやそのままでは通用せず、時代おくれといわざるをえないでしょう。しかし、小波の性格でもあり、また小波が創作童話の内容としてめざした、明朗さ、光明性、楽天性は子どもたちに接する者と、子どもたちに与えるものの双方にとつて、今もなお欠くことのできない大切な要件ではないでしょうか。

（新宿区四谷幼稚園）

## 新刊保育図書

### 幼児の教育—原理と研究

津守 真・木原溥子編

本書は「幼児の教育」誌に掲載された論文をまとめたもの。幼児教育の原理から研究方法、記録、さらに制度上の問題までを、系統立てて編集したものの。最近の幼児教育の傾向を知る上にまた概論書としても適切である。

内容—第一章「幼児教育の課題」では幼児教育全般にかかわる問題を扱う。第二章「幼児教育の原理と方法」では教育課程、指導計画、子どもを観察する技術など幼児教育の実際にあたってよりどころとなる論文を集めた。第三章「保育の中での研究活動」では、保育研究の基本論、さらに実践記録の具体例をのせてある。第四章「幼児教育制度をめぐって」は義務制の問題など制度上の問題を衝く論叢。

執筆者—牛島義友・及川ふみ・恩田 彰・斎藤文雄・坂元彦太郎・清水エミ子・荘司雅子・鼻地三郎・鈴木正子・多田鉄雄・津守 真・樋口三紀子・日名子太郎・堀合文子・松村康平・水原泰介・山下俊郎・渡辺桂子他

A5判 四三二ページ 六五〇円

発行 フレーベル館